

皆クリストの生地をエルサレムの南に當るベトレヘムとしてゐることは顯著なる事實であるのに、何故に此の經の論述者が之をエルサレム城中に生るとしたのであるか、解し難い。

年過十二求於淨處名述難字即向若昏人湯谷(128—129)。此の一節は多くの文字を整理しないと讀解し難い。先づ求は來の誤である。此の殘卷中には來を求と誤つてゐる所が少くない。例へば134行の「從天求」、144行の「所有病者、求向彌師訶邊」の如きはそれであつて、17行の「已求」の如きも亦た同様であらうと思ふ。次に若は最後の谷の誤であつて、削り去るべきのが其の儘に残つたか、然らずんば若の下に谷を移すべきである。何故ならば「向谷昏」の三字は132行にも見え、また133行には「當即谷昏」とも見え、谷昏は次に述べるやうに人名で無ければならぬからである。次の人湯は入湯の誤なるべきこと、134行と比較すれば自から明らかである。かく整理して之を讀み下して見ると、彌師訶が「年十二を過ぎて、淨處述難と名くる處に來り、字は即ち谷昏マザナといふものに向つて入湯した」との義で、疑も無くイエスの洗禮を向けたことを記したものである。年十二を過ぎといふのは路加傳四ノ四に記さるゝイエス十二歳の時父母に伴はれてエルサレムに至り、父母に別れて教師の中に坐し、聽問應對した事實に關係を有するものであらうし、淨處述難と名くるところに來りてといふのはジョルダンの聖地を言ふに外なるまい。述難**z'ut-nan* を以てシリヤ語などの *yordan* を寫したものと見るのは少しも無理はない。133行に「多難」と書いてあるのは、また此の述難の訛であらう。谷昏の谷は廣韻に欲・浴等と同音で余蜀切とし、別にまた穀と同音で古祿切ともして、二音の存したことを示し、そうして普通に知らるゝ如く吐谷渾の谷を余蜀切に讀むべきを示してゐる。即ち *kok* の外に *yok* の音の存したことは固より疑無い。昏は廣韻集韻共に呼昆切とあるから *yon* である。され